日中
おかやま
題字故原田 親
No. 1025
2024/7/1
日中友好新聞

発行所
日本中国友好協会
〒111-0053
東京都台東区浅草橋3-2-5
鈴振ビル5階
電話 03(5830)3140(代)
FAX 03(5830)3141
http://www.jcfa-net.gr.jp
E-mail:nicchu@jcfa-net.gr.jp
振替 00110-1-21176

日中友好協会
岡山支部
〒700-0034
岡山市北区下伊福
西町1-53 民主会館1F
TEL・FAX(086)258-5806

日中友好協会
倉敷支部
〒712-8031
倉敷市福田町浦田2461-41
TEL・FAX(086)455-7800

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rizhongyouhao.iinaa.net/
メールアドレス
nicchuokayama@yahoo.co.jp

二〇二四年の七夕折鶴の飾りつけができました！

今年は、“さんかくおかやま”より少し駅よりのポールにつるしました。真ん中のウクライナカラーをいつまで飾ればよいのでしょう。今年は、ガザに人権を取り戻そう！」の文字も追加しました。皆さん見に行ってくださいね。

真田

第18回 中国残留日本人の体験を聞く会

真田

2024年6月15日（土）13時から標記の会が岡山国際交流センターで開かれました。その中で語り部としてご自分の祖母の話を聞き取り、語ってくださった山崎哲さんの話しをまとめてみます。

「戦争はどのように人の人生を変えるのか ―中国残留邦人山崎幹子の経験から」

敗戦の年1945年には1555万人の残留日本人がいた。山崎幹子は1940年に、10歳で満州に渡る。福島県生まれ。

幹子（よしこ）の父は教員として1939年に満州に渡り、翌1940年家族を迎えに帰り、母と弟（当時7歳）と一緒に満州に渡る。船で朝鮮半島に渡り、その後は列車での移動。その途中で弟の足が凍傷にかかるぐらい寒かった。

1941年幹子は一人で東京に帰る。その後母と弟も帰ってくる。叔母の家でお世話になる。

1945年4月父が家族を迎えにくる。1945年3月の東京大空襲の被害を心配して、満州のほうが安心だということで満州に渡る。

幹子は一人佳木棋（ジャムス）に行き、女学校に入る。

8月9日ソ連が攻めてきたので逃避行が始まる。8月13日勃利（ボツリ）に着く。そこで母と弟に再開する。9月牡丹江から列車で南へと向かう。10月新京（現在の長春）につく。そこの難民収容所で父と再会する。

そこに出入りしていたヨウさんという中国人の店に働きに行く。急に高熱に襲われ、チフスとわかる。そこのお客さんの韓さん（国民党の警察官）の家で医者に診てもらい看病してもらう。治ってから収容所に行ってみると誰もいなくなっていた。

そして、内戦で国民党が負けると、韓さんが刑務所に入れられる。その後、韓さんの甥（王成清）から求婚され結婚する。4男2女に恵まれる。

1972年日中国交正常化したのをきっかけに、日本へ連絡を取ろうとする。1975年日本の叔母のところに手紙を書く。叔母が生きていて、幹子の一家全員死亡となっていることを知る。

1977年一時帰国する。1983年、長男夫婦、4男、次女と共に帰国する。その後、夫も来日する。幹子は弟もどこかで生きているのではないかと思い続けていた。

中国語も日本語もできるため15年間中国帰国者生活支援センターで働き続けた。

中国残留邦人のお話を聞くことは何回かありましたが、皆さんまだ日本語がうまく話せないため、結局中国語で話したことを、通訳が日本語に直して私たちに伝えてくれるという感じです。

ところが今回の山崎さんのお話は、お孫さんがご自分の祖母の体験を話してくださるという形でした。大変聞きやすく、内容は驚くような事実ばかりでした。

どこにでも出かけて話してくださるようで、岡山支部でも語り部の方に来ていただいて、話を聞く会を持ちたいですね。

日中友好協会倉敷支部第２０回定期総会開かる

宇野忠義

6月23日、午後1時から倉敷健康福祉プラザ視聴覚室において総会が開催された。

梅雨入りした雨天の中、諸行事と重なり、出席できない理事もかなりあり、参加者は10名と岡山支部の来賓（河井氏）と少なかった。総会の開催案内の発送が遅れたこと、議案書が事前に送れなかったことも影響している。事務局体制が作れないことも影響している。それでも、岡山市、総社市、井原市の会員参加があったことは有難い。

議長選出の後、栗本支部長の挨拶、来賓の挨拶があり、倉敷市長と華僑華人総会会長劉勝徳氏からのメッセージの紹介があった。

議事では、73回全国大会前後の日中友好運動を取り巻く情勢について、国内政治、日中韓首脳会議、台湾問題、「憲法改正」をめぐる情勢報告の後、議案の質疑を行った。

1号議案（1年間の活動報告と２０２４年度の方針）、2号議案（23年度決算報告、24年度予算案）の質疑がなされた。会計決算報告については、監査の中田順士氏が昨年春より入院手術、その後療養、リハビリ中であり、歩行困難となられ、監査ができない状態が続いており、23年度もできなかった。監査がないままの報告であったが、事情を説明して、出席者の了承をいただいた。新たな監査の選出は次期理事会に任された。

新役員の選出が行われ、支部長は栗本泰治氏（再任）、理事は犬飼繋、宇野進、宇野忠義、大本芳子、河田千春、筒井保行、平井昭夫氏がいずれも再任された。新たな理事として、三宅誠志氏が選出された。1回目の理事会で、宇野忠義が理事長に選出された。

なお、会議では、会員、役員の高齢化と減少傾向が大問題として提起され、日中友好協会が、善隣友好の平和・文化団体であることに確信を持ち、戦争の嫌いな方、中国文化に興味を持っている方は一人残さず、特に、若い方、ご婦人の方への呼びかけを強めることが提起されました。

「中国人（留学生）との交流会」

5月19日(日)に岡輝公民館で、標記の会を開催しました。話してくださった中国人は胡満意さんです。留学生ではなく岡山で働いていらっしゃいます。当日参加者は、6人でした。

胡さんの自己紹介文を掲載します。

自己紹介①

胡満意

私は湖北省十堰市竹山県宝丰鎮水田坪村の出身です。湖北という名前は、洞庭湖の北に位置することから来ています。洞庭湖は中国で最大の淡水湖の一つで、総面積は2820平方キロメートルです。これは、日本の琵琶湖の約4倍の広さです。

十堰市は「中国のトラックの都」として知られています。50年前、この市は中国第二の自動車製造工場の設立に伴って建てられました。一方、竹山県の歴史はさらに古く、日本の弥生時代である紀元前1000年頃には中国の歴史書に登場しています。当時は「庸国」として知られていました。日本の弥生時代末期には正式に「上庸県」として設立され、三国志にも上庸に関する記述があります。日本の古墳時代末期には、特有の黄色い竹があったため「竹山」と改名され、現在まで使われています。宝豊という名前は、この北部にある女媧山の伝説から来ています。女媧と伏羲がここに住んでいたという伝説があり、多くの宝物があったため「宝豊」と名付けられました。

私の故郷は非常に辺鄙な山村で、西安市までは車で約413キロメートル、約5時間の距離にあります。武漢までは約550キロメートル、約6時間の距離です。しかし、西安への直線距離は約225キロメートルで、武漢への直線距離は約450キロメートルです。山間部に位置するため、産業はほとんどなく、現在でも町にはいくつかの工業企業がありますが、農業が主な主業です。農機具はほとんどなく、耕作、播種、収穫は主に人力で行われています。平地はほとんどなく、稲作は平地で行われ、山間部は牛耕が主流です。多くの人々は一生のうちに町に行くのが最も遠い旅であり、県まで行くのは最も遠い場所です。普段の収入は、農忙期に他人の農作業を手伝うことや、春夏に茶を摘んで製茶することです。ほとんどの家庭には茶樹があり、私の家にも2つの茶園があります。両親は茶を作ることができますが、主に自家消費用です。あるいは緑茶を摘んで販売することもあります。

次回へつづく

映画「大地の子」（変更になりました。）

総集編第２部「流刑」
第３部「再開」

日時：８月４日（日）

14時～16時

場所：ライフパーク倉敷視聴覚ホール

次回の新聞発送作業は
7月11日(木)午前10時半から
民主会館2階で行います。
前回お手伝いくださった方です。

河井
田中
犬飼
真田